

本本 鄉順

講談社

本^{ほん}郷^{ごう}

一九八三年三月三十一日 第一刷発行

一九八三年六月二十四日 第三刷発行

著者——木下順二^{きのしたじゅんじ}

© Kinoshita Junji 1983, Printed in Japan

発行者——三木 章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二三 電話東京三—四四—二二（大代表）

振替東京六—五〇〇

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——一六〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。

ISBN 4-06-200366-X (0) (文1)

本

郷

装帧·平野甲賀

本郷が好きである。本郷に生れて、間十年がほど抜けたけれども、あとはずっと、今も本郷に住んでいる。

旅の時だけではない、東京都内の外出の際でも、本郷という土地へ戻ってくると、なにやらほっとする。

これから何を書きだそうとしているのだから、まだ自分でもよく分っていないところがあるのだが、一番の大根はどうも、本郷が好きだということをいいたいに尽きると思われる。間十年ばかり本郷を抜けたというのは、父親が郷里の熊本へ隠居する時に、隠居といっても昔は隠居もずいぶん早くて父親は五十歳にもなっていなかったかと思うのだが、しかし江戸時代はもって早くて四十代初めの隠居も珍しくなかったと聞いたことがある。もともと昔は早かったといってみても、今日一体あの当時の隠居という語感に当ることがどこかで実行されているのかどうか、とにかくそのとき私は熊本へ持って行かれて、小学校の後半と中学と、高等学校は旧制

第五高等学校だが、その時期をそこに過した。いわば青春の日々の十年ほどをそこで送った。だからいわゆる戸籍上でもまた実感としても、熊本は懐かしい郷里である。

しかし本郷もまた、今は戸籍も本郷に移してしまったからいわゆる戸籍上でもまた実感としても、本郷は懐かしい郷里である。

ふるさととは遠きにおいて思ふもの。両方からの牽引作用があるのかという気もしないではない。

東京駅をたつ時は「熊本へ帰る」という。

熊本駅をたつ時は「本郷へ帰る」というのである。

だが、それと同時に、いわば愛玩する壺を毎日撫でて楽しんでいるような具合に、そういう気持で毎日本郷という町とつきあいながら、そこをますますわが郷里にしてしまったということ、少しは自慢していいのかも知れないというふうにも考える。

実は、熊本へ持って行かれる前の暫くを、私は本郷区ではない隣りの小石川区に住んでいた。そのことについての釈明をしておかないと気が済まない。

釈明とはなにごとであるかというと、小石川で小学校三年の私は関東大震災なるものを体験し、それについてはいろんな思い出があるのだがその話は別の時のこととして、今日の文京区

が当時は小石川区と本郷区に分れていた。戦後一九四七年三月十五日にこの二つの区が合併して、この名前が私はあまり好きでないのだが、文京区というものができた。なぜこの名前が好きでないかというと、なにやら土地造成的な、私の感覚でいうと無教養みたいな名前だからである。文京区役所が出しているある印刷物によれば、一般募集をしたがなかなかきまらず、旧小石川区役所の職員からの応募の中にこの名前があり、それは「親しみやすく、区の性格を端的に表わしていて、文教の府のイメージを表現している」から採用したとあるが、どこが一体親しみやすいというのか。何を一体区の性格だというのか。文脈のつながりが悪いのでよく分らないが、文教の府を区の性格だというのなら、文教の府ということばも私はあまり好かないが、それとの語呂合せで、文京とはいかにも安っぽい。

ついでながら、余談だが、いや、余談でないことに先々なることになるかも知れないのだが、そして以下暫くは前に書いたエッセイをなぞるようになるのだが、一九六五年四月一日に、私の住んでいる町の名前が変った。悪名高き地番変更と称するやつで、駒込千駄木町が向丘（むこうがおか）となった。二つの漢字の間にカもケも挟まないというのは、何か根拠があるのかどうか知らない。

この地番変更にはあっちこっちで反対運動が起ったが、いずれも結局降伏させられてしまったらしい中に、反対を貫いたのはわが隣町である弥生町だけで、それは弥生式土器発見の地と

いういわれもさることながら、当時東大、現在最高裁の団藤重光さんや、亡くなったサトウ・ハチローさんが住人として頑張ってくれたお蔭であったと聞いているが、真相のほどは知らない。その弥生町からすぐ坂を降りたあたりの一帯なども、以前は宮永町とか藍染町とか八重垣町とかいう、いずれも頭に根津という文字を載せて呼んだものだがまことにゆかしい名前の町であったのに、これらもみんな征伐されて、根津何丁目という殺風景で事務的な名前になってしまった。最近地名というものの文化的意味を再検討する気運が起って来ているが、私もまた、地番変更なるものには未だに腹を立てている一人である。

だが、わが新町名の、向丘^{マウキ}は、それほど気にならないというより、むしろ気に入っている。それは実は、字こそ違いが、向ヶ岡^{マウカ}という地名は昔からあって、例えば『江戸砂子』に「向ヶ岡 彌生町一帯の高丘を稱し、忍が岡より池を隔て、相向ふの義と云ふ」(『本郷區史』から孫引)とあるように、上野の山から墨田川の向うに島のごとく見えるところが、向島^{マウジ}であったのと同じく、ここいらは本来、あそこから見て、向ヶ岡^{マウカ}だったのである。落語の『崇徳院』なんかでも、どの速記を見ても、(上野の山の)清水さまから眺めるてえと、下に弁天さまの池が見えるし、向うには向ヶ岡、湯島の天神、神田の明神さまが見えて、というふうになっている。その向ヶ岡に、かつては第一高等学校の五寮がそそり立ち、現在ささやかなわが家も存在しているというわけだ。

近頃おはやりの、伝統的な、名前だからいいというのではない。歴史もあるが、それよりも、いかにも土地造成的ではなく自然につけられた名前であるところが気に入っているのである。

しかし『崇徳院』ではないが、昔はあっちこっち、ずいぶんと見晴しがよかったもんなだろうな。現にわが家から五、六分、団子坂上の鷗外旧居を鷗外が観潮楼と名づけたのが二階から品川沖の白帆が見えたからであることは、彼の『細木香以』を読めばすぐ分る。観潮楼のすぐ筋向いにある小学校の名は汐見小学校だが、そして団子坂も別名を汐見坂というが、これらも同じ意味からの命名だったに違いない。今日そこから一体何が見わたされるか、御用とお急ぎのないお方は、一度確かめに来てごらんになるとよろしかろう。

一つどうでもいいようなことをつけ加えておくが、さっき私は通称に従って、弥生式土器と書いたが、百科全書なども大抵そうなっているけれども、あれは当時の向ヶ岡弥生町で発見されたもので、弥生町、式土器と町の字を入れるのが正式であるらしい。『日本歴史大辞典』（河出書房）などには、項目として町の字入りのものしか載っていない。

何を話しているのだから分らないようなことになって来たみたいだが、いいたいことは、文京区はもと本郷区と小石川区であった。つまり本郷と小石川が合わさって文京になったのだから

ら、文京にいるということは小石川にいても本郷にいても別にどうということはないのであって、だから昔しばらく小石川に住んでいたといってもそれは本郷に住んでいたというのとさして変りのない言ってみれば同じようなことなのであるという釈明を、別に誰にいう必要もないからこれまでいったことはないけれども、心の中ではそういう釈明をずっと私は持ってきたし今も持っている。それは本気で持っている。あの熊本の十年間をのければ私はずっと本郷に住んでいたものであり、私がそういうのをこじつけなどと冷かしてみても無意味であって、それほど本郷に執している。

その本郷の台町三十番地というところで生れたのだが、生れた日のことを大変よく覚えてい

る。
本郷台町というのは、日本近代文学史上有名な例の菊富士ホテルのすぐそばであった。本郷三丁目から赤門の方角へ歩いて左側、つまり大学と反対側の二つ目の角にその頃燕楽軒というレストランがあり、私が生れて少ししての頃らしいが宇野千代さんがその女給であったとか、そのこととは無関係に徳田秋声氏らが時々そこで会合したとか、文学散歩[〃]的話題にこ

と欠かないその燕楽軒のあとが、今は十階建てのバチンコやバブのはいった雑然たる雑居ビルになっ

てゐる。そこを左へ曲るとそう広くない道幅の両側にびっしりと商店が立ち並ぶゆゑい

下り坂の道が見渡せるのを菊坂だと思っている人があるらしいが、そこはまだ本郷四丁目通りであつて、その通りを数百メートル行つた先から菊坂と名前が變り、それをもつと行つた先の、当時でいうと菊坂町七十番地のへんが、樋口一葉が四年ほど住んだところである。本郷四丁目通りが菊坂になるところは四つ辻で、そこをこちらから行つて左へ（その角は、かけはぎ屋、さんだが）本妙寺坂を上ると真砂町マナヅナのものと電車通りに出、そこを突つ切つてちよつと行つた左側に、啄木が下宿した喜之床という理髪店が昔あつたわけだ。啄木とゆかりの地名や建物はまだいくつかこのあたりにあり、そのほかの文人の例は省略するけれども、いろいろと本来、文学散歩、的な土地柄であつたこの場所に、自身がのちに、文学散歩、的存在となる菊富士ホテルが、最初は菊富士楼という名前で一八九六年に建てられたわけだ。さっきの四つ辻を左へではなく右へ（その角は、機械の組立屋、さんだが）坂を上り、上りきつたところを左へ曲つて突き当つたあたりのところに菊富士ホテルはあつた。そしてそこから西へ、長泉寺という今もある寺を越して見える台地が本郷台町であつた。であつたというのは、ここも今はただ本郷五丁目という味気ない町名に変えられてしまつてゐるからである。

本郷四丁目通りがそこから菊坂と名前の変るあの四つ辻を右へ曲らないで、まっすぐに菊坂の通りをもう少し歩き、二つ目だかの角を右へ、やはり相当急な坂になつてゐるの上つて行つて上り詰めた左側に私の生れた家がまだ残つてゐるが、そこはいま天理教の教会になつてゐ

て、わが家はその一部に組みこまれているのだから、教会の隣りの家につながっているのだから、外から見ただけではどうもよく分らない。

ピアノの音がしたようだった。

人造石ということばがあの頃よく使われ、セメントに小石をまぜて塗った壁面を擦って光らした人造石の外壁をわが家の応接室は持っていたと思うのだが、入り組んだ建物の隙間の奥にそういう人造石の壁面がちらと見えるようでもあり見えないようでもあった。

あまり暑くもない曇り日だった。

またピアノの音がちよつとしたようだったが、それは教会の隣りの家のほうから聞えて来たようでもあった。あの西洋風の応接室に、一人をのければ家じゅうピアノの弾けるものは誰もないのだがピアノが、壁にちよつとはめこんだふうな塩梅に置いてあったその周辺の光景が私の中に浮んで来た。ピアノの上のほうには、でこでこした金色の額縁の中に、大人のような顔をした西洋の美少女が顔をしかめながら、くくれたようにまるい手頸の棘を抜いている大きな油絵が掛かっていた。西向きの窓から眺めると、わが家は台町の台地の突端にあったから眺望がよく、春日町から白山上へ行く電車通りを越して遙か向うの、柳町や初音町や餌差町のほうまでが見渡せた。

八月二日の朝七時三十五分に私はこの家で生れた。時間が分っているのは私の臍の緒が未だ

に私の抽出の中であつて、その包み紙に父親がきちんとした筆の字でその数字を書きつけているからである。その日は朝から曇つていた。最初から庭の景色が眼に映つていたのは、真夏で障子があけ放つてあつたからだろう。そう暑くはなかつたというより、温度というものの感じがなかつた。向うに建仁寺のくすんだ垣根があつて、それがくすんで見えたというのは、垣根の割竹はみんなこちらへ裏側を、二つに割つた竹筒の内側を向けて並んでおり、その内側はすべて薄白い乾いた皮膜が煤^{すす}をうつすらとかぶつたようにすすけて見えていて、その前に第二次大戦後しばらくして亡くなつた長兄が、ぼんやりと、いがぐり坊主で白いかすりに、どういふわけか袴をはいて、こちらではないどこかを見つめながらじつと立つて、人形のように動かずじつと立っている脇に、青木が真赤な実をつけていた。寝ている私の頭のほうには、細いひごのようなものを横に並べて御簾のように作つた古びた衝立が立てまわしてあつた。何の物音もせず、というより、やはり音というものの感じがなかつた。

というような話をあまり人にしたこともないが、話すとき必ずといつていいほど戻ってくる反応は二通りあつて、一つは私が冗談をいつて笑わせているという解釈だがこれは問題外。いま一つは、それらの道具立はみな私がもの心ついてから見たもので、それを生れた時の記憶のやうに勘違いしているのだという俗説めいたものだが、どうもそうではないようである。なぜかなら、長兄はその頃その家にいたけれど、ある事情からすぐ遠くへ行つてしまつて、本郷のそ

の家を私たちが離れるまでその家に来たことは一度もなかったそうだが、ということでは十分な説明にならないというのなら、あの一風変わった衝立は、母に聞くとそのときまさにそこに立っており、その後すぐこわれて捨ててしまつて、私がもの心のつくずっと以前にもう家にはなかったのだという。

今でも眼の底に、私ははっきりとその衝立が見える。

ただ青木の赤い実というのがなにやら氣になつて、今、というのはこれを書いてゐる今だが、山本健吉さんの歳時記を引いてみたら、「冬中、木にあつて美しい」とあるから、これは何かの記憶と混乱しているのだろう。

ずっと玄関の戸があいて、中年というよりは少し若い感じのふとり氣味の女の人が出て来て、その人の眼と私の眼がびったり合つてしまつた。

「？……」というまさにそういう顔を、その女の人は一瞬間した。

何かいわなければいけない。

「わたし——ここで生れたものなんですが」と、まさか切り出すわけにも行かないがと考へかけたとき、女の方は左へ向いて、そのまま坂を下りて行つた。……ここで生れたものですがと切り出したつて、あの人、答えようもなかったろうが……きつとふり向いてこつちを見てるんだらうな……

のろのろと私は、反対の方角へ足を運んでいた。……もしあの女の人がもう一瞬あのままでいて、こつちが口をきかなければならなくなったらおれは何といっただろう……いや、何といえど適切だったんだらう……。」「ここ、何番地でしょうか?」……

女の人の出て来たその門柱に、本郷五丁目十番地八号とはつきり書かれていた文字を眼の底に浮べて私は苦笑した。

とにかく、帰ったらもう一度あれを見てみよう。……

あると思っていたところに、あれがなくて、大分あつちこつち探してから私はその袋をみつけ出した。中には「週刊読書人」の切抜と渋沢秀雄さんの手紙がはいっている。

切抜は一九六一年二月十三日付のもので、座談会「方言よもやま話」。出席者は渋沢さんと柴田武さんと私で、私はその日初めて渋沢さんにお会いしたのである。座談会が終ったあとの雑談のときに私は渋沢さんにいった。本郷のあの家をおやじから買って下さったのは渋沢さんだったんだそうですね。へーえと渋沢さんはびっくりされ、それからどういふ懐旧談をお互いとりかわしたかは覚えていないが、その年の六月十七日付で渋沢さんから頂いた手紙の冒頭はこうである。私信の無断公開をおゆるし願いたい、「冠省 いつぞやは座談会で失礼いたしました。あのころから本郷台町へある稽古ごとのため通いでしたが、そのおり台町三十番

地の旧宅（あなたがおうまれになって、四つまでお育ちになったという家）が昔ながらの姿で昔ながらの場所に立っているのを発見しました。（映画のフィルムを逆まわしたような感慨をおぼえました）。」

あの座談会の日、何年に渋谷さんがあの家を買われたかを伺って、それで私が四つまでそこにいたことが分ったわけだが、父親がなぜあの家を手放したかは知らないけれどもあの家を建てたのは父親であって、ある日『東京大学基督教青年会年表附解説』（一九五七）というのをめくっていたら、一九一二年九月十日「平沢氏より木下某に会館敷地建物を一万五千八百円にて売却する仮契約をなせりとの報告を受く（退去は十月中）」というのにでくわしたのだが、この木下某が私の父親であることを、私がこの年表を見たのはむろん刊行の五七年よりあとのことだけれどもその十数年前に私は知っていた。

東大基督教青年会というのは本郷追分町、今はこも向丘になったが、東大農学部前にある東大YMCAのことである。私は熊本の中学生のころ洗礼を受け、大学入学当時は本郷のクリスト教徒になろうと真剣に考えていたから、一九三六年、十年ぶりに熊本から本郷に戻った私は、自然のこととしてこのYMの、まさに本郷にあるYMの宿舎にはいった。余談になるが、東大YMの宿舎は、大学を卒業したらむろん出なければならぬ。それを私はよそへ移る努力を怠ってそこに沈溺し、今から考えるとよくそんなことが許された、というより、許されない